



前置胎盤って、 いったい何？



胎盤が赤ちゃんの出口をふさぐ、 ハイリスクな状態をいいます

- 「前置胎盤」とは、胎盤が子宮の下方にある赤ちゃんの出口（内子宮口）を覆ってしまう状態のことをいいます。受精の際に受精卵が正常の着床部位よりも下方に着床することが原因です。出口がふさがっていて赤ちゃんが出られないため、帝王切開での分娩となります。
- 原因としては妊娠回数の多さ、帝王切開の既往、喫煙、多胎妊娠などが関連しているといわれ、およそ200分の1の確率で起こります。
- 「前置胎盤」は出口にかかる胎盤の程度によって分類されます。なかでも、胎盤が完全に出口を覆ってしまう「全前置胎盤」は大出血しやすく、帝王切開の分娩でも母体にとって高いリスクがあります。
- 出口にはかかっていなくても、胎盤の端が出口の近くにある状態を「低置胎盤」といいます。胎盤は子宮の出口から離れているほど分娩時のトラブルが少ないため、「低置胎盤」でも帝王切開になることは多々あります。特に胎盤の端から子宮の出口までの距離が2センチ以内なら、帝王切開をおすすめします。
- 「前置胎盤」は妊娠30週以降に超音波検査によって診断します。妊娠初期には胎盤が子宮の出口に近い場所にも見えますが、子宮が大きくなるにつれて位置関係が変わるため、妊娠後期にならないと判別がつかないからです。「前置胎盤」と診断されたら、MRI検査という画像診断を併用する場合があります。



元気なのに安静!?

何がそんなに危険なの?



妊娠中も分娩時も大量出血が 起こりやすく、命に関わる病気です

- 「前置胎盤」の診断を受けたら、まず気をつけたいのが出血です。妊娠後半に、痛みを伴わず、突然出血を起こすことがあります。子宮が大きくなり、胎盤が子宮の壁からはがれてしまうためです。その場合は必ず病院へ連絡を。出血量によっては入院安静の上、経過観察となります。
- また分娩時に帝王切開で赤ちゃんを取り出した後、胎盤が娩出される際にも高いリスクがあります。胎盤が子宮からはがれた後は、子宮の収縮により出血が止まるのが通常ですが、出口に近い部分はこの収縮の力が弱いため、出血がとまりにくいのです（妊娠 & 出産のトラブル解説「弛緩出血」参照）。「帝王切開だから安全」とは決して言い切れないのが「前置胎盤」の怖いところです。
- そこで「前置胎盤」と診断されたら帝王切開の日程を決め、いざというときの出血のために自己血外来を受診し、「自己血貯血」を行います（PART8「自己血貯血」参照）。さらに術前検査、麻酔科受診などの準備をして、分娩に備えます。予定日に近くなるほど手術前に陣痛が始まったり、お腹が張りやすくなって出血リスクが高くなるので、手術日は早めの設定となります。
- 術後の入院日数は、「自己血輸血」や「同種血輸血」を行ったとしても通常の帝王切開分娩とほとんど変わりません。入院生活、退院後の生活も同様です。ただし「同種血輸血」を行った場合のみ、数カ月後に感染症の検査などを行います。

※「癒着胎盤」参照